

# 史料から読み解く金沢城の歴史

## はじめに

- ・城郭研究と文献史料…考古学・縄張研究に比べ、意外にも進んでいるとはいえないのが現状。年代・城主・性格といった基礎情報を与えてくれる重要な情報源
- ・少ない一次史料、多い二次史料…一次史料で情報を固め、二次史料をどう活かすか
- ・金沢城…金沢柵の比定地だが、金沢城も県内有数の中世山城で重要な遺跡。どのような歴史をたどってきた城館なのか。文献史料を可能な限り収集し、現時点で描ける歴史を提示したい

## 1. 鎌倉～室町期の金沢城

### ①鎌倉・南北朝期の金沢城

#### \* 「小野寺氏系図」【史料1】

- ・小野寺道綱の項に、奥州藤原氏攻めの軍功として「於羽口雄勝・仙乏両軍ヲ賜フ、従其比仙乏金沢ニ住ス、雄勝太郎ト云」
- \* 「由利家及打越家系図」(『本荘市史』史料編I下)
  - ・楠一族が金沢城に。楠木正成四代孫の「金沢少将正家」  
⇒いずれも伝承レベルと言わざるをえない

### ②室町期の金沢城と金沢右京亮

#### \* 「津軽屋形様御先祖ヨリ之覚」(『青』2、1343)、「津軽御先祖之次第」【史料2】など

- ・15世紀、南部氏と安藤氏の争いで南部氏が秋田・仙北・津軽地域を獲得。当時の南部家当主の三男が金沢城主として仙北に入部＝金沢右京亮  
⇒永享6年(1434)「後花園天皇口宣案」(『青』2、1311)に見える右京亮家光か
- ・その後、仙北地域で一揆が起き、金沢右京亮は切腹。3歳の息子(南部右京亮<家信か>)は家臣に守られ久慈へ脱出し、後の津軽家へと続いていく、というストーリー  
⇒正確な時期は不明だが、「小野寺家系図」(『横』系図1-1)などから寛正6年(1465)～応仁2年(1468)か。小野寺泰道との争いか
- ・南部氏にとっての金沢…安藤氏からの領土切り取りというよりも、「京都御扶持衆」としての遠隔地所領説が有力。日本海側と太平洋側を結ぶ結節点としての金沢(若松20、斉藤21ほか)
- ・15世紀後半は、恒常的な山城が各地に出現してくる時期。金沢城もこの頃に築城?

※このほか、『戸沢家譜』(『横』補遺2-3-1)に応永27年(1420)に「金沢源兵衛」、永禄11年(1568)に戸沢氏と小野寺氏との金沢での合戦が記されるが、真偽不明

## 2. 戦国期の金沢城—小野寺氏・金沢金乗坊・金沢氏—

### ①小野寺道秀と金沢城

#### \* 「小野寺家系図」【史料3】・「小野寺系図」(『横』系図1-4)など

- ・次に登場するのが、小野寺泰道の孫(植道の弟)にあたる孫三郎道秀なる人物。「道秀 孫三郎 金沢城主」、あるいは小野寺景道の弟として「道秀 孫七 仙北金沢ニ居城ス」などと登場

- ・『月の出羽路』に記される「金沢権太夫光秀」と同一人物？茨島館（美郷町）が居館という  
⇒おおむね 16 世紀前半、小野寺氏一族が金沢城・茨島館に入ったか。金沢氏を名乗る？

\* 「源姓本堂系図」【史料 4】

- ・寛永 19 年（1642）成立。戦国末期の本堂忠親の祖父、頼親の項に「伊勢守 与出羽国金沢城主道秀合戦於野口、討死、四十四歳」  
⇒「道秀」＝小野寺道秀か。やはり時期的に 16 世紀前半の出来事の可能性大

\* 「河村氏由緒書」【史料 13】、「源姓幡江氏系図」（『横』補遺 1-177）

- ・河村氏…金沢住で小野寺氏（六郷・金沢氏？）旧臣、後に佐竹氏に仕える
- ・幡江氏…金沢住でもともと金沢氏を名乗り金沢城主との由緒だが、小野寺氏らの旧臣？

②「平城の乱」と金沢城

\* 「奥羽永慶軍記」（『横』3-1-2）、「語伝仙北小野寺之次第」【史料 5】など

- ・小野寺植道…天文 15 年（1546）の横手佐渡守・金乗坊の反乱で討死。金乗坊は「仙北金沢ノ住役氏」・「山伏」とされる
- ・金乗坊と金沢城・金沢氏との関係は不明だが、『奥羽永慶軍記』では金沢氏は別個に登場
- ・金沢城がある山は、古来「聖地」で修験の場。金沢城と八幡神社・修験寺院が併存か

\* 『月の出羽路』

- ・戦国期の金沢八幡神社神主は土肥安芸守（増田城主土肥氏一族）とされる。金乗坊と関係？

③六郷氏・金沢氏と金沢城

\* 「柞山峯之嵐」【史料 6】

- ・「金沢之故城…天正ノ頃ニハ六郷兵庫正乗カ弟金沢権太郎邑食ス」。小野寺氏一族としての金沢氏に、六郷氏から養子入りして新たな金沢氏に？
- ・『月の出羽路』に記される「金沢権之助光長」と同一人物？天正 8 年（1580）の文書写も所収

\* 「金沢殿宛て大宝寺義氏書状写」【史料 7】

- ・大宝寺義氏と金沢氏が友好関係。義氏は由利へ侵攻中。金沢氏も誰かと合戦中で、山を越えて和賀氏が援軍を派遣。誰との合戦？＝小野寺氏か？
- ・「其地」＝「金沢殿」の居所なので、金沢城の可能性あり。小野寺氏が金沢城を攻撃か？
- ・文書の年代…通説では天正 10 年。しかし、近年は天正 9 年以前説も（胡 18）…おそらく、天正 9 年以前が正しい。仙北干戈以前から六郷・金沢氏は小野寺氏と対立関係か
- ・「金沢殿」は何者か…おそらく金沢権太郎。この頃には六郷氏一族としての金沢氏が成立か

\* 「石郷岡氏景書状」【史料 8】

- ・天正 11 年、安東家中の南部縫殿助が赤字曾から金沢へ、そこで六郷氏が「生害」させる
- ・同年、「金沢一揆」勃発との説も（「金氏系図」『横』補遺 1-197）

\* 「最上義光黒印状」【史料 9】

- ・天正 15 年「仙北干戈」…小野寺氏と六郷氏の対立、小野寺氏が金沢へ出陣

※金沢城は、小野寺領の北端、六郷領の南端に位置する「境目の城」といえる

### 3. 近世初期の金沢城—金沢氏から佐竹氏へ—

①奥羽仕置後の金沢城

- ・天正 18～19 年（1590～91）奥羽仕置・奥羽再仕置を経て、六郷政乗は秀吉から 4518 石の所領を安堵、金沢氏ら麾下も存続、秀吉の蔵入地も設定。一時、検地反対一揆が勃発

\* 「中郡領知上り高書上ゲ手控」【史料 10】

- ・文禄 3 年（1594）の六郷領の諸村・石高などの情報を記した史料の写し
- ・金沢氏領＝金沢本郷、金沢前郷、金沢長岡村の三ヶ村。金沢氏領＝2489 石＋蔵入地 823 石＝3312 石。地名として、「根小舎、本町、荒町、下館」が見られる＝戦国期段階で城下町として成立していた様子
- ・六郷氏麾下の久米氏領の安本村、飯詰村などは、かつて「横手」が奪ったが六郷氏が取り返したとの記載…天正年間の小野寺氏と六郷・金沢氏らとの戦いのことを指すか

\* 『奥羽永慶軍記』（『横』軍記物 1-33 など）ほか

- ・文禄 4 年に最上氏と小野寺氏の合戦（岩崎合戦）。六郷・金沢氏らは最上方に付く

② 「北の関ヶ原」と金沢城

- ・慶長 5 年（1600）「北の関ヶ原」では、最上義光と上杉景勝が対立。小野寺義道は上杉方に、六郷氏らは最上方に

\* 「六郷政乗書状」【史料 11】

- ・「横手表へ者、此方従金沢人数可指出候条」…金沢城が小野寺氏攻撃の拠点となっている様子＝「境目の城」。大きく改修される契機としては、「北の関ヶ原」が最後か

③ 佐竹氏の出羽入部と金沢城

\* 『佐竹家譜』・『奥羽永慶軍記』【史料 12】

- ・慶長 7 年（1602）、佐竹氏が常陸から出羽へ転封。佐竹義重が六郷城に入城、梶原政景・東将監、太田五郎左衛門が金沢城を受け取り、入城との説

\* 『奥羽永慶軍記』・「河村氏由緒書」【史料 13】ほか

- ・慶長 8 年、六郷にて一揆勃発。金沢城からは東将監、大塚権之助らが出陣
- ・小野寺旧臣で金沢住の河村筑前らが佐竹氏に味方、案内役をして鎮圧
- ・「金沢七騎」（『月の出羽路』）…河村氏など古来金沢住の武士七家。家老梅津氏の家臣に

\* 『月の出羽路』など

- ・慶長 9 年、佐竹氏が金沢八幡神社を「御再興」

④ 金沢城の廃城

- ・金沢城の廃城年代…「元和八年ニ破却スカ」【史料 6】とされる。藩政期の金沢は、羽州街道沿いの交通の要衝、宿場町として繁栄

\* 「梅津政景日記」

- ・慶長 17 年（1612）4 月 2 日条…「金澤代官所」の存在
- ・同年 9 月 6 日条【史料 14】…「金澤城山守」について「筑前」（＝河村筑前）が政景を通して家老の渋江内膳に「侘言」し、従来通りに認められる…河村氏が金沢城の「山守」
- ・同日条…政景が「金澤城之内、畑ひらきの儀」を申請し、これも渋江内膳から認められる  
⇒代官所や山守の存在、開墾が計画されていることから、この時点ですでに廃城か？

おわりに

- ・金沢城の基本的な性格…小野寺領と六郷領の「境目」に位置する「境目の城」。周辺の城館と比較して規模・構造にレベル差があるのは、そのためか
- ・基本的には六郷氏・金沢氏段階の遺構（天正期～慶長 5 年）と思われるが、佐竹氏がどれほど手を加えているのか
- ・六郷城や茨島館と金沢城との関係…金沢城は金沢氏の居城？ 六郷氏の直轄城館？

## 主要参考文献

### ■ 著書・論文

- ・遠藤巖「戦国大名小野寺氏一植道・輝道関連史料の検討一」(『秋大史学』第34号、1988年)
- ・小野寺彦次郎『中世の小野寺氏 その伝承と歴史』(創栄出版、1993年)
- ・金子拓「小野寺義道」(遠藤ゆり子・竹井英文編『戦国武将列伝1 東北編』(戎光祥出版、2023年)
- ・胡偉権「大宝寺義氏の戦争と外交―由利侵攻を手掛かりに―」(『秋大史学』第64号、2018年)
- ・斉藤利男「南部屋形」三戸南部氏の歴史を探る―誕生から戦国大名へ―(同編『戦国大名南部氏の一族と城館』戎光祥出版、2021年)
- ・島田祐悦「金沢城・陣館遺跡」(飯村均・室野秀文編『東北の名城を歩く 北東北編』(吉川弘文館、2017年)
- ・竹井英文「東北地方における中世城館関係史料集成―秋田県・山形県編―」(『東北学院大学論集 歴史と文化』第61号、2020年)
- ・平井聖ほか編『日本城郭大系2 青森・岩手・秋田』(新人物往来社、1980年)
- ・深澤多市『小野寺盛衰記』(東洋書院、1979年)
- ・若松啓文・斉藤利男「津軽氏関係資料解題」(『青森県史』資料編中世2 安藤氏・津軽氏関係資料、2005年)
- ・若松啓文「金沢右京亮とは何者か―弘前藩津軽家祖先伝承から東北の室町時代史を復元する―」(『令和2年度 後三年合戦金沢柵公開講座資料』、2020年)
- ・渡部景一『「梅津政景日記」読本』(無明舎、1992年)
- ・渡部景一『続「梅津政景日記」読本』(無明舎、2009年改訂版)

### ■ 自治体史、各種資料集・報告書類

- ・『横手市史』通史編原始・古代・中世(横手市、2008年)
- ・『横手市史』史料編古代・中世(横手市、2006年)…『横』
- ・『横手市史叢書10 史料編中世補遺1』(横手市、2008年)…『横』補遺1
- ・『横手市史叢書11 史料編中世補遺2』(横手市、2009年)…『横』補遺2
- ・『仙南村郷土誌』(仙南村、1992年)
- ・『六郷町史』上巻通史編(六郷町、1991年)
- ・『新編北上市史』資料編古代・中世(北上市、2022年)
- ・「月の出羽路」(『菅江真澄全集』第8巻、未来社、1979年)
- ・『大日本古記録 梅津政景日記』全9巻(東京大学出版会)
- ・『青森県史』資料編中世2(青森県、2005年)…『青』2
- ・『青森県史』資料編中世3(青森県、2012年)
- ・『本荘市史』史料編I下(本荘市、1985年)
- ・『本荘市史』史料編III(本荘市、1986年)
- ・原武男校訂『佐竹家譜』上(東洋書院、1989年)
- ・『金沢城跡―後三年合戦関連遺跡調査事業に伴う第14次調査概報―』(横手市教育委員会、2023年)  
ほか、金沢城跡・陣館遺跡関係の一連の発掘調査報告書
- ・各年度の『後三年合戦シンポジウム資料集』・『後三年合戦金沢柵公開講座資料』(横手市教育委員会)

【史料1】小野寺氏系図 秋田県公文書館所蔵（『横』系図 1-1-5）

通 綱

禪師太郎、治承之比ヨリ源頼朝公ニ仕ル、寿永之比、志田先生源義広反逆ノ時、小山ト一所ニ勉軍忠、養和之比、木曾義仲為テ追討ト、蒲範頼・源義経ニ属シテ上洛、元暦之比、平家追伐之時、範頼ニ從テ赴テ西海ニ度々抽軍忠、  
文治五年、奥州藤原康衡退治之時有軍忠、依軍功之賞、於羽口雄勝・仙乏兩郡ヲ賜フ、從其比仙乏金沢ニ住ス、雄勝太郎ト云、其所ヲ于今号小野寺ト、

【史料2】『青』2、津輕家文書

二三 津輕御先祖之次第

津輕御先祖之次第

南部殿秋田仙北津輕南部御手ニ入候時、御子三人御座候、何茂被召連御上洛被成、赤松修理大夫殿を以

公方様江御礼被仰上、一男大膳大夫・二男左京亮・三男右京亮と御官途被成候、大膳大夫殿者屋形号御免被成候而南部ニ御在城被成候、秋田ニ者左京亮殿御在城、仙北金沢ニ右京亮殿御在城也、其後秋田仙北一揆出来仕、秋田左京亮殿ハ南部江御除被成候、金沢右京亮殿ハ於城中御切腹也、右京亮殿之御子、御年三歳ニ而御座候を、高屋豊前守先祖大曲和泉守と申者、守立忍而南部江御下被成候、其後於南部秋田左京亮殿江ハ上之久慈を被遣候、金澤右京亮殿之御子息を則右京亮殿ニ被成下之久慈を被遣候、何茂 公方様江被仰上、左京亮殿ハ尾張守、右京亮殿ハ信濃守ニ官途被成候、

【史料3】『横』系図 1-1-1

1 小野寺家系図

小野寺氏研究資料 第一編

稚 道

中宮亮、父景道ニ若而離レ京都ニ登リ將軍家江奉公、其内晴道小野寺ノ代官也、稚道下国之後ニ仙北横手ニ居住、天文十五年五月廿七日生害也、

女 子

遠藤盛康室

道 秀

孫三郎、金沢城主、

【史料4】『横』補遺 1-補 205

源氏本堂系図

常陸志筑本堂家文書  
茨城県立歴史館寄託

頼親

伊勢守、与出羽国金沢城主道秀合戦於野口、討死、四十四歳、

【史料5】『横』縁起等 4-2-13

13 語伝仙北小野寺之次第

飯塚和助氏所蔵  
東京大学史料編纂所謄写本

、金沢之山伏名失念致候、横手之佐渡と申者一身仕候而、湯沢をせめ、輝道御嫡子四郎丸殿羽黒山へ御忍ビ被成候由、其後四郎丸殿羽黒之別当御頼、庄内之加勢にて横手佐渡・金沢山伏を討、横手居城被成候由、四郎丸殿仙北小野寺遠江守景道殿と申候由、後二吉田村江御隠居被成候由、此御子之内、西馬音内殿御跡続ニ御越、御若名小野寺孫三郎殿与申候、後名肥前守茂道殿と申候、其後之名式部太夫殿と申候、城禿之前年か死去被致申候由、二男孫六殿御兩人御城張申前に死去被致候由承伝候、三男八之丞殿御跡継、城張之時、御親茂道殿御前二庄内江御越被成候、光安寺と申寺ゆかり御座候而、此寺ニ御逗留被成候、

「柞山峯之嵐 乾」

同郡 金沢之故城

故城ハ金沢本町村ノ山ニアリ。八幡ノ社アル。

寛治四年午 義家將軍 陸奥守ノ任ニ往キ、三郎清原武衡・四郎家衡 義家朝臣ニ叛ク。コレヲ金沢ノ館ニ攻ル。戦ヒ將軍不利数々、軍慮ニ疲ル。

同五年未九月十六日金沢ノ館ヲ攻ム。月ヲ越、城中糧食已ニ尽。武衡・家衡降ヲ乞フ許サス。十一月十四日ニ城陥ユル。武衡ハ斬罪ス。家衡ハ梟小

次郎次任ト組テ梟首セラル。賊党ヲ誅戮ス。一国平均ニナル。

天正ノ頃ニハ六郷兵庫正乗カ弟金沢権太郎邑食ス。

慶長七年ニ 東將監梶原美濃守当城ヲ受取ル。

元和八年ニ破却スカ。

【史料7】『横』119

119 大宝寺義氏書状写

秋田藩家藏文書五十一  
白土免角清滿所藏

其元鉢楯之様、余々無心元候条、雖路次中返覚候、及音通之処ニ、為返札委示給本望候、特自五月廿五日数度之一戦、每度勝利之由、誠々無比類候、彼使在留中ニも被打勝之段及披露候、自何当方塞手儀候て、此堺急度不及助成候事無念千万候、菟角油利中之逆徒相支故候条、頓速可令静謐候間、存知各申附、去八日中油利号西目地利へ及近陳候、加勢之事者、耕作令熟候時分、可指遣由存候処、彼書面去六日ニ到着、遂披見候

間、猶以手前之兵革一途差急度候条、重人衆下之候間、彼口之事者、必々近日中ニ可付落居候、其外上油利・下油利之事も、条々子細共是有覚之儀口上ニ申附候間、能々可被相尋候、手前之事当月下旬ニ、先々白河

北へ可相移之由存候条、鮭延中之備之事も涯分可及下知候、少も無心元

有間布候、將亦以前之書状ニも申露候ツ、今度自横手之兵乱之儀、以数年之籌如斯御取成候事、世間無其隱候、尤可為覚知候哉、唯今之分ニ候

者、被抛万事和与之儀可被相縫候、畢竟其上之籌略大切ニ候条、一味中

之事者幾度も被遂調談、長久安泰之構可為肝心候、被誤候而之上ニ者、

千鞠之後悔も不可入候、并近辺之事は、以累代之深情互ニ被申合儀候歟、

今度之事自和賀口同心之由候、定有好之儀可為其分候へ共、乍聊尔令加

言候、一度知音之間変作之儀者、自他聞之晁、尤当座之不足ニ候、弓箭

之一烈之事懇情無異儀候様ニ、可被申合事專ニ候、随而上最上口以之

外混乱之儀出来ニ付而、自数ヶ所当庄惘望、分而号山辺方今般一乱之物

主ニ候、今月十日ニ同名之者被指越、色々被申分筋目共候条、先以書状

之事相納候、爰許之儀は自諸口如何様之訴訟候共、一方向ニ油利中之事、可令退治之旨存詰候間、可心安候、兼又如何共相量候而、鉄炮衆之十も

廿も指下度候へハ、彼使さへ洋々ニ可罷屈之由申之間、不及是非候、余無心元候条、玉葉少々進之候、此等類者每便ニ可得其意由存候、然者彼小幡之事不似合儀ニも候歟、又其元ニも可為用意候へ共、弓箭道之事者、以当座之武略得其利候事、時々有之儀に候間祝申候而進入候、心馳之意趣於取成者、可為本望候、目出重畳、恐々謹言、

(天正十年) 七月十二日

義氏 (版刻花押影)

金沢殿

御音札畏入候、於深浦口逆意之方候つる、露頭候条、何も被致成敗無何  
事候、可御心易候、将亦縫殿助爰元相はつれ、赤字曾口より金沢へ被罷  
越候処、即被為（逃カ）生害候由承之候、左様之趣及披露、一段祝着之由被存  
候、巨細小鸭備申可申候条、不能詳候、恐々謹言、

（天正十一年）  
二月十五日

氏景（花押影）

六郷殿  
御報

135 最上義光黒印状 【史料9】『横』135

藤田文書  
東京大学史料編纂所影写本

其以来者依無題目音絶、非本意候、仍自其郡向秋田被取詰、兵革之処三、  
鉄炮以下成共不進助成候事、竟外二候、於此方も向庄（欠掛）寄手候故、乍有  
心中疎遠之躰候、随而秋田間之儀、小介川取成を以和親之由肝要候、就  
之向六郷金沢被動干戈候由候、洞中（うづら）之事三候ハ、被抛不足、免許候様  
ニ諫言可然候、乍去相支儀も有之、人数等所用ニ候者、かせ者成共少々  
可指遣候、委返翰待入候、将亦庄内之儀、大宝寺方就被致降参、身命計  
相助、山形江為引登、三庄一篇ニ討納候、依之油利十二頭之面々も皆以  
致悞望候条、任其意令赦免候間、矢嶋を始皆以遂出仕候、秋田之儀も石  
岡主膳を以檜山当代若年候之万篇、我々憑存候由、度々通信候、此表之  
儀有伝聞可為喜悅候、爾々頃日致辛勞候庄内之面々詞を相懸、又此度被  
罷出候旁にも機遣有間敷由申、各為可令一統、庄内へ相下候、如何様帰  
府之上委可申越候、事々重而、恐々謹言、

（天正十五年）  
十月廿一日

義光（黒印）

西野修理亮殿

348 六郷政乗書状

秋田家史料

追而申上候、早々其地まで御参陣候て太儀無申計候、扱々、自爰元  
手合之儀水高きと申候、北うら之儀不見届候故、遅々申事ニ候、乍去  
今日足輕共出し申候間、煙見え可申候、水落次第ニ其元へ拙者可罷  
出候間、其刻以書面を可申上候、

一、先日最上への御状之御返事、昨日（十七日也）参候間即相届申候、最上へ乱入

之会津衆悉被打果候而、残すことなく罷成、当朔日ニ悉被引除候由候、

庄内衆も一人も不残悉皆被打果申候間、弥々可御心易候、赤孫（赤尾津孫二郎）二（二）

まへも書中申度候へ共、此者急申候間、追而可申述候由、乍恐奉頼

計候、以上、

又申候、南部ニハ稗貫ニ一揆起候而、行儀（南部利也）信濃殿ハ御陣之由承候、

其表一昨日も火之手見え申候条、内々無御心元存候処三、御懇書拜見

仕令大慶候、從爰元も為御手合与罷出度候へ共、川水高く候て相延候事

迷惑仕候、併今日長田表へ人数指出候間、煙見え可申候、上浦之儀自最

上加勢参候間、定而上浦口へ可被相働、大森へ之助勢ハ有之間敷候と存

事ニ候、横手表へ者、此方從金沢人数可指出候条、是又可御心安候、将

亦、戸沢事于今我等同意ニ横手表へ可相働儀無之候、菟角横手一統と相

見え申事ニ候、御領分北浦境目無御由断可被仰付候、恐惶謹言、

（慶長五年）  
拾月十八日

乘（花押）

（ウツ巻）  
〔墨引〕

六兵庫

秋藤太様江参貴報

乘

慶長七年、佐竹義宣上洛、白川ニ旅宿セラレ、家康公ヨリ、榊原式部少輔・花房助兵衛尉ヲ以、本領常陸国ヲ召上ラレ、羽州仙北・秋田・六郷ノ郡ヲ賜ルノ条、国替仕ルヘク由、命ニヨツテ北国ヲ歴テ、秋田ニソ下リタマヒケル、義宣父義重ハ、年四十有余ノ時隠者トナリ給ヒケル、同常陸ヨリ下リ給ヒテ、六郷兵部少輔居城ヲ請取給ヒテ居住シタマフ、其外、秋田・山北ノ城数之事、

一、金沢城ニハ六郷兵庫頭舎弟権太郎居住シケルカ、東将監・梶原美濃守請取事、

【史料10】『本荘市史』史料編Ⅲ 本荘藩1-2

(一五九四) 文禄三年)

2 仙北中郡六郷領の構成

(中郡領知上リ高書上ケ手控)  
(秋田県雄勝町湊塚氏所蔵)

一、金沢本郷 根子舎、本町、荒町、中野、米沢むら

金沢本領

老仔四百六拾五石

三斉市アリ、

補156

河村氏由緒書

【史料13】『横』補遺1-補156

A2882-1648

一、先祖河村筑前、其先者仕小野寺遠江守義道、山乏金沢ニ居住、<sup>(仙北)</sup>彼地支配仕罷在候也、

一、慶長七年御国替之砌、<sup>(兼以下同)</sup>六江兵庫頭政乗六江ヨリ常陸工所替之後、六江ニ相残家中之侍、御当家工不随、一揆鋒起、山乏中騒動ス、因之同年十月、御旗本ヨリ東将監義賢御大将ニテ御人数被召連、山乏工御出馬、此時河村筑前・小友村三浦治部兩人ニ被仰渡候者、今度六江一揆徒党之者共御仕置被成之間、彼地案内可仕旨被仰渡故、筑前者支配之者共召連、三浦治部同前働、一揆之者共輒ク御鎮メ被遊也、其時筑前者首式討取之、無比類働キ、御褒美ト東将監殿ヨリ御証文被下候也、<sup>御証文ハ焼失 仕無之候、</sup>一、右之働忠功被思召由ニテ、從義宣公様御知行三十石河村筑前拜領之、并七石共二代々跡目無御相違拜領仕候、<sup>(采力)</sup>実父宋女相果候時、私幼少ニ候得共、家督無御相違拜領仕候、

【史料14】『大日本古記録 梅津政景日記一』

政景日記 一

110

九月五日、

一、内膳殿へ御見廻として、六郷へ日かけに參候、

同六日、

一、金澤御檢見之事申候へハ、御かてんこて、太山與一左衛門こ、内膳殿被仰付候、一、金澤城山守之事、筑前侘言こ付あ、内膳殿へ申候へハ、如右之被仰付由、一、金澤城之内、畑ひらきの儀申候へハ、是又御けんミ衆こ、なハあてさせ候へと被仰候、一、院内御屋作之差圖、我等こ致候へと御意之由、内膳殿被仰付候、

金澤檢見  
金澤城山守  
畑開檢地  
院内屋作差圖

政景六郷ニ遊  
江政光ヲ見舞  
フ